

特217  
49



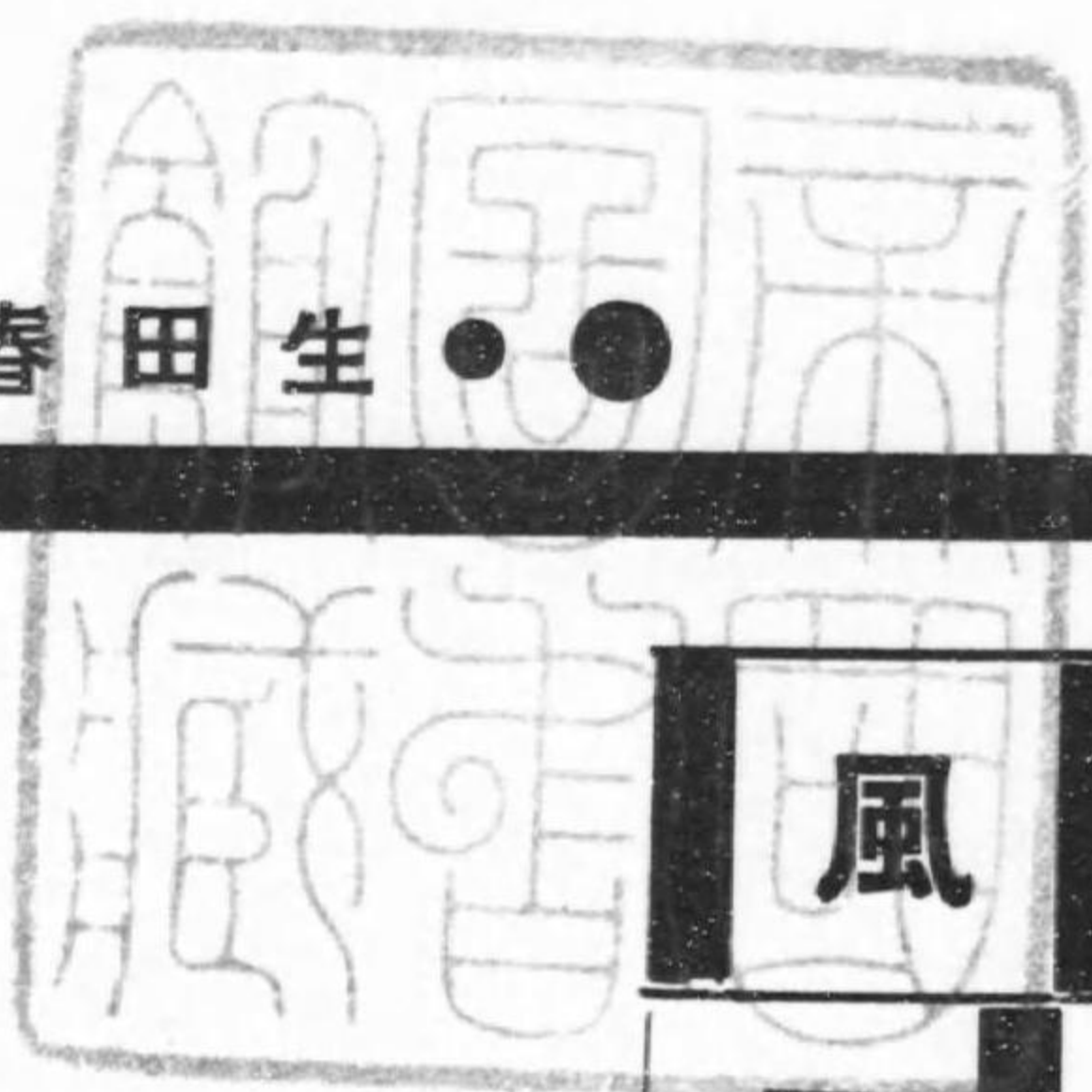
始





特217  
49

序月春田生



風 烈  
景 風

大島庸夫著

▽ある労働者の詩集△

京東・  
版社人行



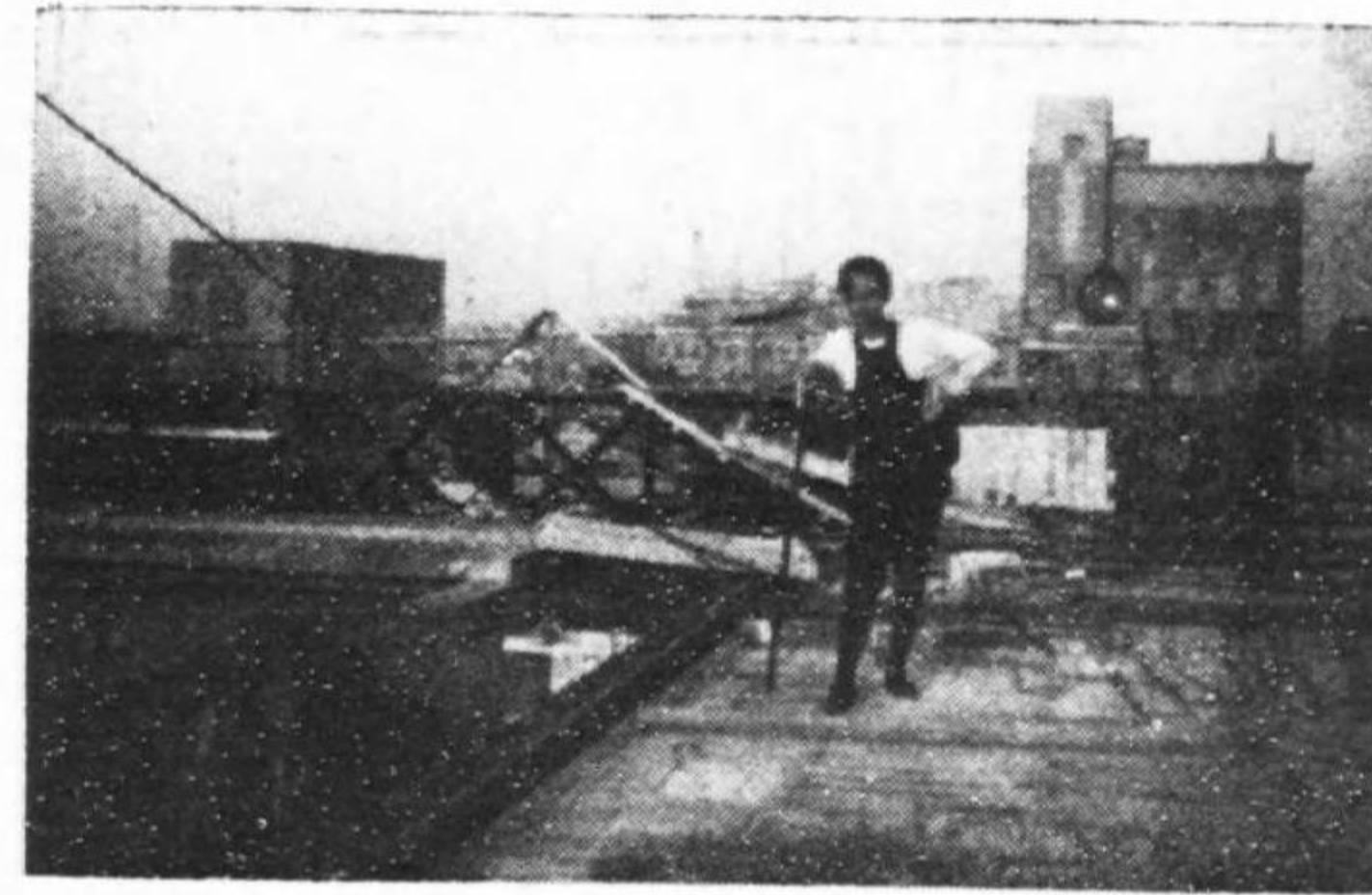


影 近 者 著

常にわが詩魂の光である

恩師 生田春月氏に献ず

著者



現場の著者

われ働く時、神われを賞す。  
われ歌ふ時、神われを愛す。

ラビンドラナート・タゴール

## 序

今日は何日であらうか。一九二九年の六月十一日である。それは一九二〇年でなく、また、一九四〇年でもない、その一九二九年の六月十一日である。自分はこの年代を、あらためて、自分と人との耳に叫びたいのだ。なぜならば、詩人はこれまであまりに時間の外に超然として生きて来た。然るに、我々は時代の中に、時代の苦を生きねばならぬ、時代の詩人だからである。

まことに、今日は昨日でない、もとより一昨日でない。詩人が象徴詩や、耽美詩に酔つてゐた間に、芭蕉や西行の閑寂に耽つてゐた間に、時代は激變した。晴朗であつた天候は一變して、暗雲が一天を籠めて、時代の嵐が、今、我々の上に怒號しはじめたのだ。高い樹も、低い樹も、草も、石ころもその風に吹きまくられる、すさまじい日が迫つて来たのだ。

自分は茲に、今の世相を細説しようとは思はない。社會的不安と動搖とを、あらためて説き出さうとは思はない。それは生きとし生けるものの、痛切に感

じてゐるところだからである。我等の文學もまた、今やその赤熱の反映を示しつゝあるのだ。然るに、ひとり詩人のみは、穴の中の蟹のやうに、墮眠を食つてゐた。詩人のみは、象牙の塔に立籠つて清風に嘯いてゐた。然し今、その象牙の塔も烈風に倒壊しようとする。否、我等はこれを押し倒さねばならない。穴の中の蟹は引きずり出さねばならない。

自分自身、今や、その過去十年を葬らんとしてゐるのだ。その三千六百日を、空しく費した事に、臍を噛むの悔いを覚えてゐるのだ。

自分もプロレタリアの詩人であつた。少年にして一個の印刷工であつた。然し、自分の勞働生活は、あまりに早く終つた。そして、年少、ソシアリストのクルuppに接近しながらも、文學と運動との截然とわかれてゐた、個人主義文學の盛時に際會して、いつしか溫和な詩人として、自分を見なければならなくなつたのである。然し、それもまた自分の無氣力のみならず、又、時代の抑壓の結果でもあつた。自分が社會詩人、ハインリッヒ・ハイネに傾倒した事すら、戀愛詩人ハイネへの追隨として嘲罵せられた時代が長く續いたからである。

然し、今、風向きは變つた。新しいプロレタリア詩人が輩出した。その人々

の詩は、蕪雜なものもあり、概念的なものもあつた。が、從來の高踏詩人の有たない力を有つてゐる。

自分はそれを愛した。自分もまた、二十年の詩作の底を流れてゐた、あの赤黒の線が、波上に浮び上る日に會つた。自分の詩は、既に昔日の詩ではなかつた。然し悲しいかな、自分は既に多くの餘力をあまさない、中年の詩人であつた。自分は今辛うじて、一本の杖に身を支へてゐるに過ぎない。いつ斃れるかも知れない。然し、悲しむを要しない。時代は既に力乏しい自分を要しない。自分の後には、多くの若い生命がある。澁澗たる青年の勇氣が、氣力が、新しい闘ひのために燃え上らうとしてゐる。

絶望を知らない自恃と、闘争の精神よ。そこに若さのもつ大きな力がある。自分は數ヶ月前に、これらの思ひを托した一篇の詩を書いた。

戀の苦情をやめにして

書けとはうれし政治の詩。

ボオル・クウリエの散文語、

かのペランジエの嘲弄詩、  
「獨佛年鑑」のハイネの詩、  
時代の詩人、かくて生く。

わが空しくも斃れなば、  
あまたの友よ、あとつぎて  
われにまされる詩を書けよ。  
ジャン・コクトオや、アレリイの  
伊達のすさびをやめにして  
書けよ心の血の叫び。

われも十年は悔ありぬ。  
まだうら若き身をもちて  
おきな翁さびせし枯淡ぶり。  
映畫の筋の長篇詩、

はやり小唄をのこしなば、  
人のわらひを何とせん。

このすさまじき嵐の日、  
文字の細工に得たりとし  
その感覺を誇りなば、  
詩人のみかは人ならじ。  
われも詩人とたのみなば  
嵐の鳥と啼き立てよ。

嵐の鳥と啼き立てよ。これは自分にも叫び、人にも叫ぶ、一切の詩人に叫ぶ  
自分の聲である。然るに、この微かな聲が、自分の最も近くに、忽ち、一人の  
すぐれた若い詩人を起たしめた。否、その詩人は、自分の聲によつて起つたの  
では勿論ない。常に正しい道を歩いて、人生に對してかつて傍目をしなない、眞  
摯にして敏感な魂であるその詩人は、自分の感じた事を等しく感じたのである。



自分は今、その詩人のために、人知れぬ誇りを抱かざるを得ない。その詩人のために、自分のために、また、我が新しい詩の大道のために。そして、その詩人こそ、この一巻の著者、大島庸夫君に外ならない。自分はこの一巻を讀んだ時、自分の如上の詩が、大島君のために書かれたものゝやうな思ひさへしたものである。

然し、大島君は、今日始めて詩を書いた人ではない。自分が大島君を知つてから、もう十年になる。その十年の間に、人として、詩人としての大島君の苦闘と、練磨と、成熟とがあつたのである。自分が始めて知つた頃の大島君は、端正で、純情な青年、むしろ少年であつた。夢の多い、感傷的なロマンテイストであつた。それからずつと、自分はこの若い詩人の歩みを見續けてゐた。そして、自分の豫期しないところに、この人の強い力の現れてくる事に驚いた事も一再ではない。然し、今年になつてから程、驚かされた事は曾てなかつたのだ。

それはこの「烈風々景」の一巻を見たからである。然し、これは單なる詩集ではなかつた。むしろ、一つの強い生活の聲である。労働の玉の汗である。事

實、自分は大島君の詩よりも先きに、その生活を見たのである。今や、一個の男子となつたこの詩人は、どんな姿で自分の前に立つたであらうか。六十錢で買つたきたない法被を着て、ボロボロの手袋をはめて——これをはめなければ重い鐵材を扱ふ事は出来ないのだ——阿彌陀帽をかぶつた背の高い労働者の姿それが労働詩人の姿であつた。この姿で彼は早朝から薄暮まで、赤銅色の逞しい労働者の間に交つて、現場で働いてゐたのだ。烈風の中に、重たいスラヴをかついだのだ。これは生きた詩である。労働の詩を生きたのだ。然し、大島君は詩人である。その労働の中から、衣された身體を横へるひまに、詩を書いた、書いた、むしろ詩をなぐりつけた。

その詩をはじめて見せられたとき、自分は感嘆した。それは生きた労働の詩であつたからだ。そして、自分には到底書けないものだつたからだ。これはたゞ、かの都會の喧騒と疾風との中の労働の渦中からでなくては、到底生れ得ないものである。そこに云ふべからざる力がある。しかも、その裏にある十年の教養と、詩人的成熟とが、その詩を單なる怒號や昂奮に終らしめてゐない。しみじみとした人生の哀感がにちみ出てゐて、單なるイデオロギイの操作に墮さ

しめてゐない。もとより、この詩人はインテリゲンチヤの出で、生粋の労働者ではない。この悩みは我々が共通に持つところで、そこに我々の弱點のある事は云ふ迄もないが、そこにまたこの詩の特別の意義も存すると自分は思ふのである。

今や、就職難の聲は、日本全國に轟き渡つてゐる。否、怒號の聲とはならず、底に潜んで、絶望となり、自棄となり、險惡な自己嚙咬となりつゝある。インテリゲンチヤは最も細い喉と、最も細い神経とに悩んでゐるからである。然し、その中の少数者は、時代の尖端として、新しい闘争に進出しつゝある。我々もまた、進出しなければならぬ。空しく斃れるか、斃れて後やむかである。この時代の嵐をこの詩集は指示する。

茲に一羽の嵐の鳥が、啼き立つてゐる――。

大島君はこの労働詩の第一集を残して――自分は更によりすぐれた第二集を期待してゐる――更に新しい労働の中に飛び込んでゆくであらう。それがいかなる世界であるか自分は知らない。然し、自分もまた、大島君の後について、新しい世界に進出しなければならぬ事は、自分も知つてゐる。

さらば友よ、相共に進まう。前途に何が待つてゐるか、それは分らぬが、何が待つてゐようとも、進まう。それは闘ひか、労働か、火花か、鐵鎚か――何であらうとやらう。そして詩を書かう。

佛蘭西末流詩人の、温室詩人、空氣銃詩人の、伊達のすさびでなしに、かの自由の詩人、熱火の詩人、實彈の詩人の後を繼いで、生活でその詩を書かう。實感と、生命感とで、詩を紙上になぐりつけよう。

この數年間、自分は詩集の序文を書いた事がない。熱烈に需められても、その氣持が動かかなかつたのである。然し今日、自分はこの一文を書かずにはゐられなかつた。これは、單にこの詩集を推奨する言葉であるばかりでなしに、また自分の今の心持の偽りなき告白でもあるのだ。

一九二九年六月十一日

生 田 春 月

## 自序

私の處女詩集だった「ひつじぐさ」を出版してから、數へてみるともう七年になる。つひこの間のことのやうに思へるが、七年の年月が過ぎていつたのかと思ふと早いものだ。

夢の多かつたあの頃の自分、感傷的でありすぎたあの頃の私が、思想の上に生活の上に變化をもつてきたのも當然であるといへる。「ひつじぐさ」は私の甘いセンチメンタルな時代の心の影であり、朝夕の囁きであり、思ひであつたどんな小さなものでも、眞實自分の心を映したものは、愛着のあるものであらう。あの詩集に映された私の姿には、未熟な果實の色と味ひしかないが、矢張り私にとつては、捨て難い懐しみと、愛着と、憶ひ出とが刻まれてある。いはゞ、私の夢多い時代の貧しい“monument”なのである。

いま、簾底から抽き摺り出して讀んでみると、自づと顔が赫らむやうな思ひのする作品が輯められてあるが、それがまた、私の成長しなかつた頃の眞の姿

かと思ふと、また懐しみの油然と湧いてくるのを覚えるのである。

「ひつじぐさ」の詩稿を懐にして上京した私は、毎日不案内な東京の街を當もなく歩いたものである。風に吹かれてゆく子供のやうに――。

またあまり軀の丈夫でなかつたその頃の私は、二十五歳までは逆も生きられないだらうといふ、消極的な思ひから虚無的な考へに走つてみたり、漂然と家を出て、四十日間も北海道に放浪の旅をつゞけてみたりした。トラピストを訪れた氣持――狩野の國境で泣いた自分――千鳥近い町はづれの丘で、ガスに吹かれながら郷愁ノスタルヂヤにかられた私――さうした感傷的だつた私の姿の憶ひ出のひとつびとつが、この小さな“monument”をひらくたびに新しく思ひ出されてくる。

一步、一步、私達は與へられた路を歩かなければならない。ひとつの惱みを知り、悲しみを深め、苦しみに逢ひ、憂ひを知つて歩かなければならない。

二十五歳まで生きるまいと思つてゐた私は、いつのまにかその境界を無事に過ぎてきてゐる。だが私の心の上には更生にも等しい變化をもつてきた。甘いセンチメントに酔ひ易い私の魂は、切實な生活の惱みと苦痛を知り、社會意識

に目醒め、思想的にも、生活的にも新しい相をもつてきた。

病院の白いベットの上で、静かに詩を書きたいと思つた過去の私は、今では牢獄の薄暗い窓の下で、鐵の鎖の音をきながら、または工場の蒸気鐵鏈の噪音の中で、詩を書きたいと思つてゐる。

芭蕉や西行の時代はとうに過ぎていつて、今日の私達は働きながら、雲を眺め、風の聲をきかなければ生きられなくなつた。生活が出来なくなつてしまつたのだ。

總てが生活から始めなければ嘘だ。殊に詩人は時代のよき生活者でなければならぬ。然るに、過去の日本の詩人は眞に時代のよき生活者であつたであらうか。私は疑ふ――。

自由の子シェリイをみよ、革命兒のバイロンをみよ、シルレル、ハイネの詩と思想に、その生活を思へ！

詩が吾々人生にとつて、ひとつの“necessity”である以上、私達の生活――パンと水からどうして離れ得よう。

その意味で曾ての私の詩は、心の影には相違なかつたが、あまりに裝飾品で

ありすぎた。寶石工が紅玉をブリリアント型に磨くやうに、私は私の詩を美麗な言葉の型に、宛嵌めてみなければ氣がすまなかつたのだつた。

詩の技巧家になるといふことは、詩の冒瀆者になることであり、言葉の奴隷になるといふことは、詩人にとつて最上の不名誉なことであらう。

詩が私達生きるものにとつて“necessity”である以上、時代と共に詩人も進まなければならぬ。時代と共に詩は叫びともなり、喚きともなり、絶叫ともなるべきである。

いまでは、詩に對する私の考へも變つてきた。

そして私も變つた。いや私の魂が成長してくれたのである。私のハムレットが消えて、時代のドン・キホーテが顯れてきたのである。

私は生きなければならぬ。働かなければならぬ。古風なロマンチストの夢を捨て、殻を破つて、赤裸々に生きなければならなくなつた。そこから必然的に私の生活革命は起り、私の眞實の叫び――詩は生れ出で、きたのだ。いまや私にとつて、詩はうたひ酔ふべきものではなくして、叫ぶものであり、喚めくものとなつた。

私はやつと、言葉に使はれないですむ詩人になることが出来た。

茲に集められてある詩篇のひとつびとつは、私の一ヶ月半に亘る労働生活の記録なのである。マルクスを語り、レニンの夢をみる前に、まづ私は十時間労働に突入してみた。その汗、その魂の叫び、喘ぎが、これらの詩篇なのである。

薄いこの一冊の詩集によつて、私は過渡期にある時代の風景を描いてみたいと思つた、風速のはやい烈風よりも、もつとテンボの早い時代の風景は、この詩集の出る頃には、道具立が變り、照明が變つて、思ひがけない風景になつてゐるかもしれない。

十年一夢——それは昔の言葉である。

一日一夢——今日はもう明日に通じなくなる時代である。

夢は短く、カラクリは早くなつた。

「ひつじぐさ」と「烈風々景」との間に、出す筈であつた詩集もいつか置き去りになつてしまつた。

私は、いま過ぎてゆく烈風の眞只中に立つて、成長してゆく自分の魂の相をおもひ、生活の飛躍を思つてゐる。

曾つて「薔薇の逕に草鞋の紐をしめ直して……」と「ひつじぐさ」の序に書いた私は、今では「血みどろ、汗みどろの逕に……」と書き直して、更生への第一歩を更に踏み出さなければならぬ。

總てが生活から始めなければ嘘だ。

私は更に、「明日」の日の自分の生活にあこがれ、自分の魂の伸びゆく相を思ひ、生活の飛躍を期待してゐる。

私が喘ぎながらも、こゝまで歩みつゞけてきた背後には、常に温容な師の影があつた。躓きながらも、勇氣をつけつゞ弱い心をひきたて、ひきたて、怠けがちな自分の心を勵しつゞ、こゝまで歩んで來られたことは、常に光となつて師が私の側にあつたからだ。

私はいま感謝の念をもつて、この貧しい生活の結晶を、私の恩師である生田春月氏に捧げようと思ふ。

それと同時に、いまの時代に惱みつゞ、怒りつゞ、憤りつゞ、喘ぎ苦しむ、多くの若い友達に贈りたいと思ふ。短い自分の第一次的労働生活の叫びの中か

ら一行でもいゝ、共鳴する響きがあつたら、いつしよになつて叫んでもらひたいのだ。いつしよになつて、働いてもらひたいのだ。

長いこと序を断つて居られた、生田先生が、私のために如何に眞剣になつてそれこそ熱意的に、即座に而も長い熱烈な序文を書いて下さつたといふことは、私にとつて身にあまる光榮である。

若し、私に生田先生がなかつたら、私の「烈風々景」は生れ出て來なかつたかも知れない。

久しいこと詩的感興を失つて、詩が書けないでゐた私が、堰を外した奔流のやうに、働いて疲れつゝも、多くの詩が書けたのは、私の生活の革命からでもあるが、また、私の耳に常に師の言葉があつたからだ。

血の叫びの思ひをもつて書かれた詩を常に朗讀してくれたからだ。私はこゝに師の叫びの "echo" ともなつたことを悦ぶ。

私の生活も、詩も、總てがこれからだ。

黎明よ！ と私は自分の生活と、詩魂に向つて叫びたい。そして、瘦腕ながらこの腕を仲間達へ差し伸ばさう。

装幀も扉も自分でしてみた。四月上旬から五月下旬にかけて、約二ヶ月間の朝日、東日、國民、報知、讀賣、都等六新聞の切抜きを寄せ輯めて貼つてみた。下手な繪を描くよりも却つて面白いと思つたし、詩集の中味ともしつくりすると思つたからやつてみたのである。

一九二九年六月十六日

さゝやかな森の小舎にて

著者

泣け、泣け、泣け、  
貧乏人のために、馬鹿者のために、奴隷のために、  
聴け、荒れた原から濕地から  
暑苦しい路次や、息詰る仕事場から  
仲間達の悲嘆にくれる聲が擴がる。

働けよ、さもなくば墓行きだ！

チャールズ・キングスレー (拙譯)

### 烈風々景・目次

序.....	一
自序.....	一〇
夢を捨てる.....	五
花見電車.....	九
泥濘.....	一二
鐵筋擔ぎ.....	一三
機械と人間.....	一五
夜警.....	一七
磁石の手.....	二一

鐵筋曲げ	二二
突進	二五
Anything is Something	二八
鐵を斷る	三〇
かめのこ	三二
屑屋時代	三五
現場の黎明	三八
柳と蛙	四一
ある日の自畫像	四三
戀と勞働	四五
動かない蒸汽機關	四七
問屋街の晝	四九
彼女達と俺	五一

午前三時半	五七
列風々景	五九
フンの空彈	六一
どんたく	六二
初夏の味覺	六四
社會の石	六六
節句鯉	六八
デパート爭議	七〇
笛を捨てよ	七三
街上のピエロ	七七
火が	七九
靜かなる嵐	八二
メイデー	八四



無自覺な階級……………	九一
二十世紀のダイオジニヤス……………	九三
手……………	九五
労働者と令嬢……………	九七
日本の胃病患者に……………	一〇〇
芥溜箱……………	一〇四
吾れは自由、とぶ木の葉……………	一〇六
都會のジブシー……………	一〇八
バイロンをおもふ……………	一一一
天國は近づけり……………	一一五
學校騒動……………	一一六
家を持つ……………	一二〇
蔓をきられた青瓢箪……………	一二一

悪夢……………	一二四
口笛ふけば……………	一二七
失業者の汗……………	一二九
群衆の中へ……………	一三〇
労働小感……………	一三三
— 寫 眞 —	
著者近影……………	一
現場上の著者……………	二

烈風々景 大島庸夫

安らかなものよ—— 何處、さまよふ自由？  
争ひの熄むところ、その國よ。  
榮光の輝きよ—— 何處、輝ける自由？  
全人類の平和の中に。

アーネスト・シヨーンズ (拙譯)

詩篇 五十篇

自一九二九・四・一四  
至一九二九・五・三〇

夢を捨てる

昨日の夢はもう古い。

時代に生きて働くにや

あんまり古い、夢の殻、

プチ・ブルヂョアの古い夢。

大學出たらば經濟學士

昔だつたら學士様で、

三國いちの花嫁も

果報も寝てゐて得られたらう。

どつこい、今はそれぢや駄目、

學士様では飯が喰はれぬ。

學校終ると就職で

三組揃ひのサーチ服、

さて、ネクタイのいり好み

それも今では舊い夢、

さう、とんとんとゆきやせぬ。

一も就職難、二も就職難、

きれいさつぱり夢すてゝ

まづ働くさ、働くさ。

たつたひとつのこの人生

トツア切るには「どん底」からさ、

夢をみてゐた瘦腕ぢや

どつこい社會ぢや働けぬ。

そんな意志ではちきくづる、

意志を堅めてまづ下からさ。

日傭ひでいゝ、いちにちの労働は

十時間の労働は、いちにちの糧を與へてくれる。

道路工事人夫可なり、

工場労働者願つたり、

土方稼ぎも願つたり、

鐵筋擔ぎ尙結構、

荷上げ人夫それもよい、

働くことにや變りない。

力いつばい下した鶴嘴の尖が  
跳ね返されては、また跳ね返される、  
はね返されても打込め、打込め、  
躡て、見事に突きささるまで  
それが出来たら社會に出ても、  
飯は食へるさ、意志こそ堅固。  
そこから新しい夢を築いてゆくんだ  
働くものゝ新しい時代がくるんだ。

意志が堅固で、決心つけば  
とんと世渡り朝飯前さ、  
時代のトツブを切るのも容易。

脊廣着るのはいつでもきれる、  
印半纏、腹掛け姿、  
學士さまではなれない姿。

昨日きのうの夢はもう古すぎる、  
古風な夢はあつさり捨て、  
たゞき上げるさ、まづ「どん底」から。  
トツブ切るにはその眞剣さ  
意氣と若さで生きてゆく。

## 花見電車

春、麗日のうらゝかさ

花は満開、花見のさかり。  
そろひ手拭、赤だすき  
鮎詰め電車は花見客。

割引電車がすんだばかりに  
花見気分でほろ酔ひ機嫌、  
今から酔つちや花などいらぬ  
肩の二合瓶半分からさ。

花見電車に似つかぬ姿  
世が世であつたら學士さま、  
「學士様なら娘をやるか」で  
通つた時代もあつたけど、

今は半纏、腹掛け姿。  
花が咲いても花見にゆけぬ、  
日曜きたつて休めもしない、  
割引電車にかへりは日暮れ  
それで一圓九十錢。

浮かれうかれる花見の客は、  
朝の早いのに陽気なものさ  
それに酔はれぬ學士様。  
ありのまゝにも生きよとすれど、  
マルクス、レニンを忘れよとすれど  
さても酔はれぬこの世の人生。

そろひ手拭、二合瓶さげて  
花見遊山にゆくあの氣持ち。  
俺はこれからまだ朝飯くはず  
すいた腹して現場へ急ぐ、  
春はいつくる、おらがの春は。

## 泥 濘

春の日に日照らされ  
鐵筋積んだ車を挽けば、  
氣持ちよき汗が流れる。  
泥濘ぬかるみに轍をうめて

車と共に動きもとれず、  
右に左に腕いてみれど、  
深みにはひつてどうにもならぬ。

たらたらと汗は流れる、  
春の日に氣持ちよく汗はながれる。  
人生の車もかくに重くして  
泥濘ぬかるみに動きとれずば——。

## 鐵筋擔ぎ

材料運びで一番辛いのは  
鐵筋運びだ。



嘘だと思ふならやつてみる、  
一日でいゝからやつてみる。

吋二十尺を三本も

うんとこどつこい擔いでみる、  
肩にめり込むやうにくる重さ  
それで二三町歩いてみる。

下手な人生歩くより

もつと辛いぞ、へたばるぞ、  
社會の苦痛もあんなだろ。

生きてゆくには

あの覺悟、

鐵筋擔いでゆく氣持ち。

うんとこどつこいふん張つて、

一步、一步と踏みしめて

二三町歩く辛棒だ。

### 機械テレボックスと人間

パラスを運べ！

パラスを運べ！

仕事臺の上の鳶とびが怒鳴つてゐる、

七馬力半のミキッサーミキサーが空廻りしてゐる。」

パラス運びの鮮人達は  
ヘトヘトに疲れきつて休んでゐるのだ、  
春の雲が柔かにとけて流れる。

パラスだ！

パラスだ！

いくら機械文明の時代だつて、

機械と人間とをいつしよに

動かさうとしたつて無理だ。

彼等達のノスタルヂヤは

春の雲にとけて流れる、

鮮人だつて機械にはなり得ない筈だ。

ミキッサーが空廻りしてゐる、

たうとう鳶は鮮人達の脊をめぐけて

パラスを拾つて投げつけた。

## 夜 警

チン、チン、チン、

古ぼけた八角時計が

午前の三時を打つた。

殺風景なバラックの小屋に

夜びつて俺は番をしてゐるのだ、

一圓九十錢の金を得るために  
人の寝る間番まどをしてゐるのだ。

朝七時から働いて

夕方六時まで十一時間、

そしてその上この夜警だ。

單調な線をひつばつた、

青寫眞にとつた設計圖が

束にされ、折られてある。

測量器がぶんながつてある。

貼られた工事工程表の線が

蚯蚓のやうにのたくつてゐる。

受渡しが遅れると

一日千圓の罰金だといつて、

工事主任は焦つてゐる。

「急がしさうにさいしてゐればいゝのさ」

夜業の大工等は油をうつてゐる。

その上、鐵筋の材料が盗まれる。

材料を盗んだ奴があつたので

この俺が職にありついたので、

材料監視といふ厳しい肩書付きで

朝の七時から六時まで、十一時間

體ていのいゝ立たン坊稼業、

もとを洗へば學士さま。

カチ、カチ、カチカチ

拍子木とタクシーの急速力の響きだけが  
夜の静寂にきこえて、犬が吠える。

エプロン姿のままの女給が二人

闇の中へ消えてゆく！ うす汚い笑ひ聲。

側は日本橋堀留警察署、

現場を一巡り終つて立小便

都會の夜空は薄曇り。

立ン坊稼業に、この夜警

人間一疋使ふのは勿體ない、

人造人間でも出来ないか。

螺旋を巻いて置けば時間毎  
夜警でもする機械人間はないものか、  
経済學士の夜警とは  
さても時代は變つたもの。

## 磁石の手

夜明け前の

闇の中に動く手、手、手、

怖ろしい力で鐵を吸ひつけてゆく

磁石のやうに眞黒い手だ。

ガチャリ……

錆びた鐵と鐵の擦れ合ふ音がするとき、  
その怖ろしい手が鐵を吸ひつけるのだ。  
材料置場の鐵片を攫つてゆくのだ。

擱へてみたところで

ヨタヨタの老耄だ。

その皺くちやの手で吸ひつけてみたところで、

二貫目たらずの鐵屑だ。

放つておけ、逃がしてやれ、

それがあれば飯が喰へるのだ。

あとから、あとから闇の中に

さうした手が増えてくる。

若い手、黒い手、皺くちやの手、  
女の手、白い手、龜裂だらけの手、  
みんな材料置場の鐵片を吸ひつけてゆく。  
怖ろし闇の中の手だ、  
磁石のやうに強い手だ。

### 鐵筋曲げ

二十尺、百四十本

二十五尺、百五十本

十八尺、二百本

十五尺、百四十本

みんなスラヴだ、

五分のスラヴだ。

半日かゝつてやつと半分、  
鐵筋曲げに日が暮れる。

相棒の男はヘトヘトで、  
俺も疲れてヨタヨタさ。

それでもまあだ

二十五尺、百本

十八尺、百五十本

十五尺、百四十本

半分以上も残つてゐる。

いまにあの犬のよな

鐵筋監督の奴がくるんだらう、  
そして、ガミガミ吠えるだろ。

相棒も俺もヘトヘトに

鐵筋曲げで日がくれる

現場ちや上りさうもない。

## 突 進

進め、進め

突きすゝめ。

朗かに時代の鐘は高鳴る、

進軍の喇叭はひびく、

進めばいゝのだ。

ひとつの思想にとらはれて、

ひとつの主義に拘泥して、

時代の夜明け前に逡巡するな

みよや、時代の旗は靡くを。

進めばいゝのだ

働いて、愛して、信じて、

同志達と手を取り合ふことを忘れるな。

旗のもと、鐘の音の響くところ、  
そこに新しき太陽は昇るのだ。

進め、進め

突きすゝめ。

時代のドン・キホーテ！

熱と力と、その若さ

時代はそれを待つてゐる、

時代の子を待つてゐるのだ。

ステップを踏み直し

逡巡してたらもう駄目だ。

蹴落されてゆく時代、

進めばいいのだ。  
突き進め。

Anything is Something

なんでもかまはぬ  
やってみろ！  
取越苦労ぢや働けぬ。

Anything is Something,  
Something is Anything.

夢で描いた理想郷。

そんなものへの憧憬は  
きれいに捨て、働け。

職に上下の差別なく  
働くことでは平等だ、  
どんなことでもやってみろ。

悩み苦しみ、血みどろの  
貧しきもの、憧憬は、  
自由に正義、平等だ。

生活から築く理想郷、  
どんなことでもやってみろ



取越苦勞ぢや働けぬ。

Anything is Something,

Something is Anything.

### 鐵を斷る

豚のやうに肥つた。

眉毛のない鐵工が

鐵筋を斷つてゐる。

二貫目のハンマーを

軽い木槌のやうに振りおろしては、

吋の鐵棒を斷つてゐる。

タガネで切るのぢやないのだ

タツプで叩き折るのだ、

ガラス棒をへし折るやうに。

親方の豚は四度目のハンマーで

弟子は九度目でやつと斷つた、

そして、俺の瘦腕がやつたら

への字に曲るくらゐだらう。

力だ、おそろしい力だ

俺もほし。

あの豚のやうに肥え太つた鐵工の  
怖ろしい力が欲しい。

かめのこ

雨のふる日にや

か、めのこ

トンネル長屋の

あふれもの、

いつびき、にひき

さ、んびき

數へきれない

か、めのこ。

首をちどめて

せんべい布團

食はずに寝てゐて

日がくれる。

人間並に生れたが

それがかへつて

身の仇さ、

お池のかめのこ

浮ぶけど、

長屋のかめのこ

浮べない、

いつも下積み

浮べない。

働きつとけて

死んでゆく

それが長屋のかめのこさ。

池のかめのこよりや

苦が多い。

雨のふる日の

あふれもの

布團にくるまつた  
かゝめのこ。

## 屑屋時代

乞食が減つて

屑屋が増えた、

めつきりこの頃増えてきた、

通りにあるもの攫はれる

屑屋でなくつてコソどろだ。

乞食してゐちや食へぬもの

消極的ちや食へぬ時代、

食はふとするには積極的に  
金を残すなら泥棒やるさ。

今のはやりの説教もどき  
それは勿論、大臣さまも  
下は屑屋の商賣までも  
泥棒根性化してゆく時代。

乞食が減つて

屑屋が増えた、  
これも社會のひとつの眞理。  
お大師さまの乞食はみんな  
トラツク積みで屑屋へ移住、

千住署長のお手柄話

それで豫防警察、犯罪防止。

ふえるわ、ふえるわ

屑屋の商賣。

増えたところで紙屑ばかり  
紙屑ばかりちや商賣上り、  
そこでコソどろ、鐵屑盗み  
朝の四時頃横行どきで  
都大路を豚車ひいて、  
何でも御座れで攫つてゆくよ。

あれで豫防警察、犯罪防止

きいて呆れるお手柄話。

罪人養生が警察署で、

社會がそれ等の實驗所。

それがなければ巡查も上り

指紋とられて屑屋になるは

乞食ぐらゐが關の山。

## 現場の黎明

夜業をしたまゝの現場は

戦場のやうに取り散らかされて、

朝の太陽が昇る。

アングが素晴らしい塔のやうに聳え、  
パネルが丘のやうに重ねられてある。  
そして、組まれた幾條の鐵筋は林だ。

あゝ、陽が昇る

素晴らしい力にはち切れさうな朝がきたのだ。

現場の上の黎明の美しさ、

都會の朝は一齊に歡呼の聲をあげてくる。

勝鬨だ、鬨の聲だ。

黝んだ鐵骨の林は、

きらきらと金色いろに幹を光らせ。

コンクリートの粘着いたパネルは、

白銀の置しい丘と輝く。  
そして、高いアングの上からは  
朗かな黎明のベルが響きさうだ。

人々よ、働け！

素晴らしい朝ではないか。

この高い現場の上で、

この鉄筋の林の中で

パネルの丘をつくり、鐵の枝を剪れ！

麗しい黎明がみられ

朗かな時代の鐘もきかれる。

## 柳と蛙

——澤正を憶ふ——

働け、働け、働け、

働きつゞけて澤正は死んだ。

新國劇の重荷を背負ひながら、

三十八で死んでいった。

今年も思ふ柳の枝に、

飛びついては落ち落ちては飛びつくと。

その意地を通し抜いて

新劇の澤正は死んでいった。

二役、三役、見事に演つた

熱と若さと力の男。

生きるからには意地だ、我慢だ。

柳と蛙——。

働け、働け、働け、

働きつゞけて澤正は死んだ。

柳の枝にとび付いたまゝ。

意地と我慢で思ひきり、

とびついたまゝ、死んでいった。

生きるからには柳と蛙

意地と我慢で押し通せ。

落ちても落ちても、とびつけ飛びつけ  
とびつけたらばそれでいいのだ。

### ある日の自画像

けふのひる

公衆食堂の隅で、

井の飯を頬張りながら

前の立鏡に自分の顔の素描スケッチを試してみた。

印半纏に腹掛け、

アミダ帽にゴム足袋姿の

自画像を描いてみた。

仲間よ！柔晴らしい自画像ではないか、  
色のニュアンスはなくとも

赤裸々に描き上げた俺の姿をみてくれ。  
俺の眞實の姿なのだ。

髯ものび、髪も伸び放題の相貌、  
だが、この頬の血色をみてくれ  
生きるものゝ色だ、

一杯の丼飯に命をつないで働くものゝ健康な色彩なのだ。

この姿、この血色のいゝ相貌  
熱と若さで描いた自画像、

俺は公衆食堂の鏡に向ひながら  
何年かたつて、再び振り返つてみたい  
その日の姿だと思つた。

### 戀と労働

春の一日十時間働きながら、  
若い労働者はふと思つた。

そのかみの春の一日、  
姉<sup>あひび</sup>の長き時間<sup>タイム</sup>を。

シヨベルを握り

鶴嘴を振り上げながら、



働きつゞける十時間の長さ。  
唇をよせ、胸をよせ  
戀を語りし頃の十時間の短き。

若い労働者は鶴嘴を道端に置いて  
しみ出る汗を拭ひながら、  
ふと、そのかみの頃を思つた  
いまの妻と戀に落ちた頃のことを――。

春の一日

白い雲のしづかに流れるもと、  
若い労働者は汗を流し  
十時間働きながら、

いまの妻との健康な幸福を感謝した。

### 動かない蒸汽機關

佃資の蝗いばのやうに脚を折つて、  
鐵材を積んだ駄馬うまが斃れた。  
問屋街の雑沓する路の上へ、  
動かない蒸汽機關のやうに。

春の陽に曝された  
骨張つた馬の脊からは、  
汗が湯氣のやうに蒸發してゐる。  
動かない蒸汽機關を動かさうとして、

馬力は自暴に彼等の特權を振り廻してゐる。

虐めるなよ、

さうひどく鞭うつな、手綱を曳くな！

鐵材の重みを考へてみる。

虚勢された上に、

過量に積まれた鐵材の下で斃れてゆく馬。

馬力よ。お前達下積みの人間も同じぢやないか、

虚勢されてゐないといふだけで

馬に鞭打つのが人間の特權なのか――。

手綱を弛めろ、鞭をよせ！

それから、その堅い鞭を外してやるんだ。

馬力よ！　そしてやたらに

お前の特權を振り廻すのをよせ！

### 問屋街の晝

問屋街の晝は荷車と馬車の洪水だ。

メリケン袋を山と積んだ馬車

鐵材を積んだ車、車、車、

薬品の箱、ビール箱、砂糖の荷、セメン樽、

綿糸を積めるだけ積んだ車が通る。

轂と轂とが摺れ合ひ

轆と轆とが搏ち合つて折れる、

一瞬の間も躊躇して進まなければ  
いつになつても通れやしない。  
勇氣だ、冒険に突撃する意氣だ  
進め、さうすれば道は展ける。

アレキサンダーのあの勇氣よりも、

ドン・キホーテのあの勇氣、あの意氣だ。

すゝめ、進め、何のくそ！

前後左右の邪魔物も

轂で搦つて、轆で押へりや

前へ出られる、前進々々。

日本橋裏の間屋街の晝

けふも鐵材積んだ車をひいて、  
馬車と車の洪水の中へ  
ドン・キホーテの勇氣で進む。  
左側通行もなんのその！  
通つてゆけりやそれでいゝのだ、  
前進々々、不思議のやうに道は展ける。

## 彼女達と俺

ヨイト——マケ

ヨ——イトナ、

胸突きの女達がかへる。

まだ日が高いのに

七八人の年増の女達は、

何がしの金を手に握つて

もう仕事が終わつてかへつてゆく。

元氣がいゝ

みんな男のやうだ。

腐つた男は迎もかなはない。

印半纏をはをつた女

縄でくるりと尻下りの腰を括つた女、

豚のやうに肥太つた女、

頬冠りの女、巻き脚絆の女達、

みんな元氣だ、陽氣だ。

トンネル長屋にかへつて行つても

彼女達はけふは威張れるのだ、

亭主と同等に酒も呑めるのだ。

煙草も吸ひるのだ、

働いたからだ、働けたからだ。

そして、金が握られたからだ。

ヨイト——マケ

ヨ——イトナ、

彼女達は空辨當を景氣よく振つて

普請場からかへつてゆく。

「若いの、何ボヤボヤしてるんだ」

材料置場に立つてゐる俺をみると、

彼女達は一齊に嘲笑に似た

鋭い視線を集めてきた。

女性の目ぢやない、働く力をもつた

怖ろしい目の集りなのだ。

彼女達はまだ日も高いのに

はや、金を握つて歸つてゆく、

それのに、まだ俺はかうしてあと四時間も

立つてゐなければならぬのだ

鐵筋を擔がなければ金にならないのだ。

隨に、彼女達からみたら

ポヤポヤしてゐるに違ひないのだ。

働くといふことに於て

人間は平等なのだ。

「若いの、何ポヤポヤしてゐるんだ」

世話やきの五十女の言葉が、

俺の胸にツキンとこたへたのだ。

若し、學士だといふことが分つたら、

更にどんな峻険な言葉を浴びせかけてくることか。

元氣がいゝ

彼女達は俺を尻目にかけて、

まだ日が高いのに歸つてゆく。

陽氣なもんだ、二十世紀のオブテミスト達。

印半纏着の裾から赤いフランネルの端を出した、

グロテスクな世話やき女は

ヨイト——マケ

ヨ——イトナ、

地聲をはり上げると振り返つて  
俺に赤ンベえをした。

何のことだ？

彼女達からロツク・アウトされたのか、

あゝ、俺のこの顔と瘦せた軀體では

まだ彼女達の仲間にさへはひれないのだ。

グロテスクな五十女の赤ンベえ、

そしてこの胸にこたへた言葉、

さうだ——俺は彼女達から愛され得なかつたのだ。

### 午前三時半

「もし、もし、」

はゝあ、お巡りさんだな。

何處の路次から出てきたのか、

ヒョッコリ俺の前へ立ち塞がった。

六尺近いノツポ一に

アミダ帽、モチリの外套といふ扮装。

捕物とでも思つたのか、

チロリ穿鑿的な眼をなげて

俺の側へ招り寄つてきた。

午前の三時半だ、

圓タクもとはなくなつて

犬までがビクビクものだ。

「儂かネ。俺らあ——この現場の者だ、  
夜警だヨ。」

言葉までが板について出た。

落つたものだ。

「あゝさうかね。」

側へよつてみれや何のこと

インテリゲンチヤ式のノツペリ面、

善良分子としかみられまい。

たつたそれだけの不審訊問。

「御苦勞さま——」

俺は片手の懐中電燈を

闇の中にバツと照してみた、

晝間運んだ鐵筋が瘦骨のやうに投がつてある。

おや、ピツカリ何か光つたぞ？

拾つてみたら呼子笛、

お巡りさんの落し物——

空にはいびつな朝の月。

## 烈風々景

風速二十五メートルの烈風だ、

錘つちのない物はなんでも宙に飛ぶ、

とぶ、とぶ仕事場の鉋屑が

高く、低く

環を描き、弧を描きながらとぶ。

鷗だ、かもめだ

銀翼をあげるとぶ無数の鷗だ。

そして、ウルトラの都會の空は

素晴らしい五月の海だ。

憂鬱な雲はすっかり吹きとばされて、

空は静かな海のがただ。

風にまくられながら働いてゐる、

ナツバ服の工夫たちは

みんな地上の水夫達だ。

潮灼けの顔のいろと同じだ。

高いビルディングの通風塔は

廻りすぎてか動いてゐない。

風速二十五メートルの烈風に、

時代のテンポも廻りすぎて

みようによつては動いてゐない。

## ドンの空弾



烈風に

ドンの空弾が飛んできて  
俺の腹へ突き當つたのだ。

そして、セルロイド製の人形のやうに  
ペロンと俺の腹が凹んだのさ——。

どんたく

どんたくの日には、

外へも出ずに

妻と暮す休みの一日。

花だよりもいつかすぎて

移つてきたばかりの古い家の窓には、

嫩葉が燃えるやうに繁つて

藤の花が古代紫の房を垂れてゐた。

「もう多摩川邊りの田圃は、

紫雲英できれいでせうね。」

妻は藤の花に、紫雲英の咲く頃を

ふとなつかしく思ひ出しながら、

私の汚れた半纏着につきをしてゐた。

外へも出ずに

休みのいちにち、

私達は移つてきたばかりの古い六疊間で、

去年のいま頃探ねていつた  
多摩川邊りの紫雲英畑を憶ひ出してゐた。

古い夢をもつてゐたあの頃の私達、  
その夢を捨てたいまの私達。  
せつせと針を運ばせ、仕事着につぎをしながら  
新しい夢をみてゐるのか妻は楽しさうだ。  
私も久し振りに休みの一日うち寛いで  
妻のつぎをするのをみながら暮す  
移つてきた間借りの六疊で――。

### 初夏の味覺

十錢の銀貨玉で  
「き、め、あ、ひ」を一皿とる、  
公衆食堂の晝だ。

麻痺した舌の先きに、  
ピリツとくる山椒の味覺  
初夏の味だ、新鮮な香りだ。

朝が早く、働くので腹がすく  
山盛りの丼飯を詰めても、  
まだ胃袋に隙があるやうだ。

胃袋よ！

我慢してくれ。

二人前分食ふといふことは

俺達の間では許されてない献立なのだから。

66

## 社會の石

こつこつと、こつこつと

先きの鈍いタガネで、

石工が花崗石を割つてゐる。

割れるかしらん——と思つてゐた。

分厚い石が見ごとに割れる

力もいるが辛棒だ

こつこつと、こつこつと

暑き陽に照らされ、

石工達が花崗石を剪る

肉隆々——。

力もいるが辛棒だ

鈍い鑿でも、タガネでも

石は割れる、いつか割れる。

——None need despair.

It came, it cometh, and will come.

67

パイロンの言葉を信ずる。

時はくるのだ

絶望するな、必ずに時はくるのだ、  
社会の石もいまに割れる。

### 節句鯉

雲を食べては風を呑む

吹き流しの鯉が、

こせこせした地上生活を睥睨しながら、  
五月の空に泳いでる。

雲もたどだ、

風もたどだ、

高い轍の上の生活。

だが待てよ……、

吹き流しの鯉の身にも

自由はないのだ、

吹き流しでも繋がれてゐる。

大空に、蒼穹に

手をさし伸べてひろびろと、

泳がんとすれど

果てなき空に憧憬わがれれてみれど

あはれ、鯉の身、節句鯉  
五月の空の吹き流し。

### デパート争議

「越後屋」の暖簾のあつた昔から  
平穩無事できた三越に  
店員、配達人の争議が起つた。  
要求條件はどれも同じの待遇改善  
背後で絲ひく労働組合。

客の出潮を見はからつて  
ヒラヒラと赤い襷がとぶ

斤量不足の包みを抱へた、  
貴婦人達の頭の上へ  
人込みに紛れてヒラがとぶ。

「店員権の爲に闘へ！」  
「エレベーター従業員のために、」  
「三越の店員酷使五十年の歴史を破れ！」  
「社會の正義のために奮起せよ！」

貴婦人達は知らぬ顔  
デパートメント争議のために  
三越、松屋が店を閉ぢても、  
金さへあれば心配御無用

斤量不足の買ひ物ならば何處でもできる。

エレベーターが休止したつて

上層下層の往來は容易、

マーブルの階段があるうち安心

赤い襪などフェルトの下。

抱へた抱へた山ほど抱へた

みんな奢侈品、嗜好品

その儲けで店員一人の給料が出る、

それがもらひりや待遇改善

デパート争議もありやせぬ。

ヒラヒラと、ヒラヒラと赤い襪はとぶ

「三越の店員酷使五十年の歴史を破れ！」

何がきこえる、ホールちやチャズだ

アメリカニズムの陽氣なチャズだ。

襪を蹴りけり貴婦人たちは

細い足してチャールストン。

### 笛を捨てよ

——堀口大學氏に——

「友よ あきらめよう

地球はまはる

私の五厘の笛では

人々は踊らない

友よ あきらめよう  
人々は踊らない  
私はいきが切れる  
私の笛はだまる——」

こんな情けない詩を書いてゐる、  
無氣力な詩人が日本にゐる。  
五厘の笛とは何て安い笛だ、  
そんな笛で人々を踊らさうとしたつて無理だ。  
もう、時代の無踏者達は、  
都會詩人の安價な笛では踊らなくなつたのだ。

日本の無氣力な抒情詩人よ！  
花をうたひ、戀を謳ふ  
エビキュリヤンの都會詩人よ！  
さうだ、地球はまはるものとは、  
コロンバスの昔から解りきつてる眞理ぢやないか。  
いつまでもひとつどころに  
一管の銀笛を吹きならしてはゐられないのだ。

十年一夢、誰が踊る  
五厘の安物笛の音色などに、  
尖鋭的な耳を傾けて  
誰が陶醉などするものか、  
地球は廻り、時代は急しく過ぎてゆくのだ。

古風な丘でいつまでも  
銀笛をすさぶ詩人は、  
いまに哀れな世の忘れもの。

笛の音などはもう通らない。  
泣くことだ、聲を限りに喚くことだ。  
群衆の聲はそれほどまでに、  
怖ろしい力と厚みをもつてきたのだ。  
少女、女學生踊らすのなら  
何のわけない笛でもよかる。  
さうでないなら笛など駄目さ、  
まして、五厘の安物笛ぢや。

喚け、喚け、泣いて喚け、  
銀の笛など見事に折つて  
生れながらに持つてる笛で、  
眞實正銘、心の笛で  
群衆に向つて喚け、叫べ、  
さうでなければ踊りやしない。  
時代のテンポは矢弾やじりのやうだ、  
笛を捨てねば詩は書けぬ。

## 街上のビエロ

首に警察署願濟の札さげた  
街上のビエロが、



鉦と太鼓の一人藝  
街の四辻で踊り狂ふ。

チンチン、ドンドン  
チンドン、ドン、

これも時代の狂ひ獅子  
食ふがためには狂ひましょう、  
苦しくつても泣き笑ひ。

さあさ、皆さん！  
ころうじろ。

二十世紀の街上ピエロ、  
泣いて笑つて、狂ひ死

鉦と太鼓の一人藝。

チンチン、ドンドン  
チンドン、ドン、

素顔はピエロの假面で御座る、  
顔で笑つて、心で泣いて  
四辻々々で踊り狂ふ、  
今のピエロは月には泣けぬ。

火  
が

火が、火が  
火が駆ける、

怖ろしい火の足並が。

いまに通りのものを

みな焼きつくしてゆく、

火の疾風だ。

自由、正義

解放、XX

火だ、火だ

怖ろしい力の火だ。

天も地も

命をも焦して、

時代を貫いてゆく

火、火、火

赤と黒の烽火。

街頭を駈ける

火の暴風雨は、

聽て、十字路を左右に

四方に擴がり燃えてゆく。

走る火が、火が

時代の火が足並をつくつて

通る、駈ける、駛る

火の行進。

そして、火の勝鬨は  
時代を告ぐる、  
力と熱の調べなのだ  
火の行進曲。

### 静かなる嵐

都大路をねつてゆく  
メーデーの行列は認可済、  
叫びも歌も屈済  
なんて、厄介千萬な。

前後、左右はお巡りさん  
それが日本のメーデーだ。  
自由の旗も  
解放のスローガンも、  
みんな屈済の死んだもの。

駈足、早足  
進め、止れ  
それもお巡りさんの指揮による、  
労働祭とは變なもの。

押しへしがれた情熱のやうに

屈濟みでもない叫びをあげりや、  
待つてたやうに檢束騒ぎ  
なんて、厄介千萬な。

雨にぬれ、濡れ

静かな嵐が、

都大路をねつてゆく

あれがメーデー、労働祭。

## メーデー

降り出した五月雨の中を  
メーデーの行列が通る。

赤い旗、黒い旗の組合旗が  
街路樹の淺緑のはさまを縫ふて、  
靡き、はためき、そして燃える  
時代の烽火だ、時代の火の手だ。

有頂天になつた同志達は

腕と腕とを組み合ひ、握り合ひ

怖ろしい一團となつて、

無自覺な市民を尻目にかけて

都會の眞只中を駈けてゆく。

ナツバ服に印半纏、オーバーオール職工達

赤襟嬢に鮮人達が一團になつて駈けてゆく、

時代のはやてだ、時代の疾風だ。

「團結權罷業權確立」

「労働者解放は労働者自らの手で」

幾旋の旗のスローガンに合する

元氣のいゝ労働歌は轟きひびいて、

労働者萬歳の歡聲が渦巻き起る

時代の勝鬨だ、時代の叫びだ。

進め、進め、同志達！

都會の眞只中を疾風のやうに

勝鬨あけて、進め、進め

「未來は俺等のものなるぞ——」

無自覺な市民達もいまに捲き込まれてゆくのだ、

警官達だつて片苦しい服を脱ぐ日がくるのだ。

進め、素晴らしい時代の祭壇に向つて  
あける時代の烽火<sup>のほし</sup>を、火を。

トツプが日本橋の十字街を横切つてゐるのに、

御成街道を進んでゆく行列の殿<sup>しんが</sup>はまだ芝だ。

婉延として連る長い行列、

いまに世界を通じて連る行列になるのだ。

同志達よ！ 赤い組合旗のマークのやうに

しつかりとその手を握れ！

そして守れ、この日を、メーデーを。

臆ては、お前達の手で祭壇に

時代の饗宴をはるときがくるんだ。

素晴らしい饗宴だ、血の饗宴だ  
進め、進め、その日まで  
守れ、守れ、その日まで、  
長き搾取と、虐げに惱みきた仲間達よ。

絶望するな、落膽するな

けふ行列にはひれなかつた仲間が、  
いかに多かつたかを知つてゐるか。

幾列もの群衆が、みよ、並行してゆくのを

今にその列がお前達の行列へと合してゆくのだ。

勝鬨に合せ、労働歌に合せて

群衆は呼びかけ、叫びかけてゐるのだ、

元氣のいゝ同志達！

けふの俺もその一人だつたのだ。

往く、往く、時代の相が、

烽火のやうな赤い自由旗を先頭に、

渦のやうな十字路をかき分けて往く。

高い現場の上の仲間達は

狂氣して半纏を振り、聲を嗚して叫ぶ

「こゝにも力強い仲間はある」と。

往く、往く、時代の流れは、

赤と黒との怖ろしい色彩をみせて

永代橋を渡つて月島通りへ進んで往く。

傳馬船の上の仲間達は手を上げて

萬歳を叫び、祝福の聲を送る、

「こゝにも力強い同志はゐる」と。

絶望するな、意氣と我慢だ、

時はくるんだ、饗宴の時はくるんだ。

火の如く、疾風の如く

進め、すゝめ、雨に濡れ雨に洗はれ

仲間よ、同志よ！

街頭を幕地に祭壇めがけて駈ける

そして叫べ、嵐のごとく

「守れ、メーデー、労働者」。

## 無自覺な階級

市民達よ！

嗤へながらメーデーの行列を送る、

無自覺な市民達よ！

労働者や、職工達の姿が可笑しいといつて、

嘲笑を投げつけてゐる人々よ！

いまにお前達もあの行列に

巻き込まれてゆくときがくるのだ。

時代に目を掩うて生きる市民達よ！

いまにロシヤの市民階級のやうに

憐れな存在になつてゆくのだ、  
住むところもなく追はれ、追はれて。

萬國をあげてのメイドに  
日本の資本家達や、會社の重役達は、  
通りに面した窓掛けを下させて  
耳を塞いでゐる。  
でも怖ろしい時代の響きは  
そんなことをしたつて駄目だ。

貴婦人達は――  
女工達の姿が淺慮しいといつて  
ローランサン張りの顔をそむけて、

パツカードをとばしてゐる。  
いまに嗤はれたその女工達が、  
パツカードをとばすときがくるのだ。

嗤ふものは笑へ！  
耳を塞ぐものはふさげ！  
顔をそむけるものはそむけろ！  
メイドの行列は通る、

無自覺な市民達の嗤笑の中をメイドは今年も通る。

### 二十世紀のダイオジニヤス

二十世紀のダイオジニヤス達が、



大きな鐵管の中で晝寐だ。

自動車のサイレンと、電車の噪音と

そして、時代の漫歩者達のステップの中で、

快よい晝寐の夢だ。

昔のダイオジニヤスのやうに、

桶の中で日向ぼこをうる悠長さはないのだ。

少しの休みがあれば今のダイオジニヤスは

何よりも睡眠と休息をとることだ。

十時間の筋肉労働のために。

現場の鐵骨をうつ蒸汽鐵錘の響きと

ミキッサーの空廻りの音と、そして

狡い現場監督の眼眸の光つてゐない間だけが、

二十世紀のダイオジニヤス達にとつての短い極楽なのだ。

はつ夏の都會の空は

瑠璃玉のやうで、雲が白い

南と北に口を開けてゐる鐵管の中は、

通風塔を横にしたやうに風通しがいい。

その中で二十世紀のダイオジニヤス達は、

無心になつて眠る、死んだものゝやうに

伊達な漫歩者達の軽いステップの中で眠つてゐるのだ。

手

海鼠なまこのやうにブヨブヨしてゐた掌に  
ひとつ、ふたつと、  
石のやうなこがふえてゆく。

よどみにかゝつた蠶のやうに  
白く膨れ上つてゐた指が、  
木瘤きこぶのやうに節くれだつて  
ロシヤのムジックの手のやつになつてゆく。

鐵材を運んだお蔭げだ。  
働いたお蔭げだ——。

輝かしい五月の陽のもとで

ポロポロになつた手袋を脱いで、  
ゴシゴシと、自分の手をもんでみる  
粗雑だが氣持ちのいゝ手の感觸だ。

血管でゴツゴツしてゐる手。  
あのレオナルド・ダ・ヴィンチの手のやうに、  
老トルストイの手のやうに  
偉大な表現力と創造力をもつた手だ、手だ。  
何んでも出来る怖ろしい力の表れなのだ。

### 労働者と令嬢

電車の吊革を掴んだ

労働者の解のやうな手頭から

辨當箱がブラ下つて

四十五度の角度に曲つてゐる。

車の上下動に辨當箱は揺れて

動んだ汁がしみ出てきて、

暗黒い血のやうに滴りはじめた、

惣菜の汁だ、煮豆の汁だ。

一滴、二滴……………、

煮豆の汁の雫は腰を掛けてゐる

美しいマドマゼールの肩の邊へ落ちはじめた。

そして、紋羽二重の羽織の上へ

動んだ汚みをつくつく……

込み合つた朝のラッシュ・アワー

電車の中の二人は知らない、

労働者も、そして美しいマドマゼールも。

若草いろの羽織の汚點は

だんだんと憂鬱な花のやうに擴がつて、

美味しい煮豆の汁は

みんなしみ出てしまつたのだ。

甘い汁を搾取されたのも知らない

電車の中の労働者よ！

氣付がないのか——手頭から下つた  
辨當箱の四十五度の曲りを。

取りすましたマドマゼールは  
紋羽二重の羽織の一枚や二枚、  
汚點しみが出来れば平氣に脱ぎ捨てられるのだ  
お前達、労働者の半纏を脱ぎ捨てるよりも容易に——。

### 日本の胃病患者に

大阪の島徳藏と  
新潟の堤清六が、  
カムチャツカの露領漁區落札の事だ。

株の取引中止もするといふ  
島國根性式の喧嘩をしてゐる。

島よ！ 堤よ！ 資本家よ！  
自分達の腹を肥さうとして  
カムチャツカに飢えてゐる七千人の、  
日本の漁夫達をどうするのか。  
七十八區、七千人の北海に働く漁夫達は、  
みな同胞の血だ、肉だ、そして命だ。

食はれなくなれば  
食ふために彼等も買はれてゆく、  
露國の漁船に傭はれてゆく。

日本の漁船よりも待遇のいゝ

他國の船へ身を賣つてゆくのだ。

その果てがどうなるものか、因果應報。

思想の悪化も、共産黨員の養成も

みんな日本の資本家が造つてゐるのだ。

自分の蒔いた種子の伸びるのを

不思議に思つて慮げる、矛盾撞着。

聽て、河豚のやうに肥太つてゆく

日本の胃病患者達の腹よ！

いまにバチンと破裂するのだ、

自分が喰つた御馳走に苦しみながら

見事に破裂するときがくるのだ、自業自得。

みよ！ この頃の彼等の胃下垂を、

怖ろしい胃擴張の症状を。

他人のものまで奪つて喰つたものが、

いまに破裂したら出てくるだらう。

どんなものが吐き出されるか

それが見物だ、天下の見物だ。

島よ、堤よ、日本の資本家達よ！

北海カムチャツカの漁夫達は

いまに素晴らしい人生哲學と

赤い思想を得て歸つてくるだらう。

お前達、胃病患者へのお土産には

それこそもつてこいの吐瀉劑だ。

## 芥溜箱

町の角の芥箱を

Aが漁つてゆく、

Bが掻き廻してゆく、

Cがきて拾つてゆく、

Dがきて掘り出してゆく。

それでもまだ残つてゐる

芥だから残つてゐるのだ、

芥でなかつたらみんなAの所有物さ。

Aは芥箱から紙屑を集めていった、  
Bはブリキ屑を掻き集めていった、  
Cは鐵屑を拾つていった、  
Dは後からきて芥の下積みから  
錆びた一錢銅貨を掘り出していった。

紙屑を賣つても一錢、

ブリキ屑を賣つても一錢、

鐵屑を賣つても一錢、

そして、Dは現ナマの一錢を握つたのだ。

あせらなくつていゝのだ、

勞せずして急ぐものゝ目には  
紙屑かブリキ屑が目につくばかり、  
同じ一錢を握るなら現ナマで握むことだ。

同じ人生だ、社會の芥箱溜から  
現ナマの一錢を握んだものが勝だ。  
芥箱の下積みになつたところに、  
埋まつてゐる現ナマの一錢——  
それを堀り出せばそれでいいのだ。

### 吾れは自由、とぶ木の葉

吾身は輕し——

風に飛ぶ、とぶ一枚の吾れは木の葉よ！

曾つて、かの森の小枝に繋がれて  
風ふけばひらひらと裏葉かへせし、  
あの頃の吾れ、飛ぶにとばれず。

夏の雲ながれて盡きず、  
とびて果てなき、雲を思へぬ  
雲の身に吾れもならばと——。

時はきぬ、時はきたりぬ。  
ひらひらと小枝離れて、  
果てなくも風にとびゆく

雲も同じか、一枚の吾れも木の葉よ！

### 都會のジブシー

日本橋の裏通り

狭い路次の真中へ、  
のさばり出てゐたトタン小屋が  
壊されて、取りはられて、  
都會のジブシー達が追はれてゆく、

天神髻の鮮人達の親子が

小さな鞆や竹行李を縛つてゐる。

貧相な女房が娘の下髪に、

申し譯けのやうな赤リボンを結びつけてゐる。

外からはおかまいなしに市の人夫達が、

羽目板を除き、トタン屋根を剝いでく。

ひとつの仕事場から、仕事場へ

追はれ追はれてゆく鮮人達。

砂漠の空のやうに星も見えない

憂鬱な都會の中の哀れなジブシー達。

なんて惨めな時代の放浪者なのだ。

故國はどうした。

そして、故郷はどうしたのだ。

あゝ、民族性は血だ、肉だ、



滿蒙へ遁れたつても  
放浪の子の行くところ、  
飢饉、生活苦、虐待、のたれ死——。  
内地へくればなほのこと  
憂鬱な都會の奴隸達。

虐げられつ、さすらひつ、  
都會の荒野、追はれゆく  
あまりにも無氣力なジブシー達。

星もいらぬか、太陽も、  
そして、自由も、正義も  
解放も何もいらぬのいふのか。

この弱腰達！

新しき日はくるといふのに。

### バイロンをおもふ

汗みどろになつて  
働いてかへる電車なか、  
腹掛のどんぶりから出して讀む  
バイロンの「チャイルド・ハロルド巡遊詩」。

戀に破れたバイロンよ！  
アン・イサベラに背かれた詩人よ！  
子エイダに別れた父よ！

そして、社會からも見捨てられ  
故國を去つてゆくバイロンよ！

—— わたしは去るのだ  
どこへだか知らない。

船よ、ゆけゆけ、放浪の旅

あゝ、そして彼のイギリスの島も見えなくなつた。

—— わたしはゆかねばらぬ  
わたしは浮草のやうだ。  
岩から離れて、大海の上をたゞよひ  
浪のまにまにゆられ流れ、

あらしの息に吹かれ漂ふ浮草だ。

若い追放者の巡禮者、

歴世の詩人、人間嫌ひ、

放浪の公子ハロルド！

何處にかゆく——自由の地。

ラインの河の畔りにも

レマンの湖の青みにも、

酔へ得ぬ詩人、バイロンよ！

ウォーターローの後を訪ひ

ヴォルテエルの遺跡を訪ふ、

自由の詩人、革命兒。

—空が變つた—急に變つた

お、夜よ、あらしよ、闇よ、

おまへらは驚くべき強いものだ。

十九世紀の放浪兒！

風よ吹け、吹け、潮もしぶけ

故國追はれたバイロンよ！

お前が叫んだ時はきたのだ、

いまにくるのだ、必ずくるのだ。

へとへとに疲れてかへる電車なか

空腹もいつか忘れて讀み耽ける、

バイロンの「チャイルド・ハロルド巡遊詩」。

### 天國は近づけり

ビルディングの頭が伸びていつて

天國に近づいてゆく、

神の言葉が現實化するのだ。

高くなりすぎたビルディングは

いまに天國に衝突するか、

バベルの塔のやうに壊さなければなるまい。

いくら、時代のテンポは立體的に走つて

高速度のエレベーターが通じて、

上層と下層とがあまりに離れすぎては  
言葉が通じなくなる以上に、  
もつと不自由さを感じてくるから――。

雨後の筍のやうに  
ビルディングの頭が伸びてゆく、  
そして、その尖端の屋上庭園で  
チャールストンを踊つてゐる都會人達よ！  
お前達、神の冒瀆者、背教者にも  
天國は近づきつゝあるのだ。アーメン。

### 學校騒動

早稻田の年中行事には  
學校騒動がそのひとつ、  
社會の縮圖がこゝにもみられ  
左傾、右傾の學生爭議。

「學園内の自治權確守」

赤い長旗、赤い楯

學費三割値下げを口に

羊頭かゝけて狗肉を賣るか。

實は赤化の手で御座い、

裏で絲ひく第三インターナショナル。

禿げた頭の學生監は

聲を囁らして解散宣言、

なんで散れよう學生大會。

有象無象の學生達は

自治権得るより學費の値下げ、

學費さがれば餘剰價值

マルクス主義よりカヒーズム、

プチ・ブル達の子で御座い。

「偽學生大會絶對反對」

白い長旗、白い楯

白色テロリストの関の聲、

××××、萬々歳

××××、萬々歳

早稻田大學、萬歳、萬歳、

警官隊も無壓迫、

學生監も知らぬ顔、

右傾テロリスト大會は

學校のため、國のため。

騒げ、騒げ、オール・ワセダ

左傾、右傾の學校騒動。

どつちが勝つか四つに取り組み

思想と思想のいたちごつこだ。

赤かて白かて學生争議、

それを伸ばせば過渡期の世相。

家を持つ

わが家は

森のおくがよ、

さゝやかな

借家住ひよ。

小さけれども

家持つと思へばうれし、

九尺二間のバラックなれど。

わが家に

小さき窓あり。

夕ゆうべともなればうれしよ、

赤き灯ひのもる。

働きて

歸りきたれば、

赤き灯ひにしみじみ思ふ

安らかな

けふの憩やすみひを――。

蔓をきられた青瓢箪

蔓をきられた青瓢箪が、

けふも一日、空みてくらす。

空にや三日月、細い月

げつそり憊<sup>こぼ</sup>た月魂<sup>つきたま</sup>は

あれも憂鬱、メランコリー。

外は青葉のさつき空

五月の戀もはえる季節に、

蔓をきられた青瓢箪は

メランコリーの蟲に喰はれる。

蔓を剪られたまゝでは危険

聽て、命もしなびてしまふ。

生命<sup>いのち</sup>あつての冥加であれば

働き口を探して歩く。

果ては職業紹介所

とび込んだらば締切後、

「筋肉労働は出来ますか」と

事務員は苦笑していつた。

「馬鹿にするな」と力んでみたが、

哀れ、ヒヨロヒヨロ青瓢箪

この瘦腕ちや頼りない。

五月がきて、青葉嫩葉に

爽やかな微風<sup>かぜ</sup>は吹くのに、

蔓をきられた青瓢箪が

けふも一日空みてくらす、  
買ひ手もつかずにしなびれる。  
どうしてくれるんだ、おい社会！  
月も憂鬱、俺も憂鬱。

## 悪 夢

變りましたと人はいふ。  
瘦せこけたこの頬をみて、  
險しげな眸<sup>ひとみ</sup>をみて、  
人はいふ、昔の姿影なしと。  
變れば變る人ごころ、

心かはれば身もかはる。  
あゝ、人々よこの姿  
食に飢ゑたる瘦犬か。  
嗤はと笑へ！ 人々よ！

世はかはるもの、過ぎるもの  
夢は儚く消えるもの。  
心も變る雲なれば。

きのふ思ひしその心、  
けふは消え果てあともなし。  
あゝ、戀もまたかくなるか。



嗤はゞ笑へ！ 人々よ！  
われは職なく苛立し。  
戀も遙けく寂しゆえ  
頬は痩せこけ、眼は窪み、  
昔の姿消え果てぬ。

變りしこともうべなりや。  
十年とせ、夢の日は  
かへりきたらず、過ぎ去りぬ。  
わがみるけふの悪夢こそ、  
美しかりきこの相貌かほに  
暗き翳かげをぞつくりしを。

### 口笛ふけば

—— Street angel をみて ——

淋しがるなよ  
口笛ふけば、  
ジノーでなくともアンゼラスでなくとも  
いつもいつしよよ、  
いつしよにゐるのよ。

淋しがるなよ  
日が暮れたつて、  
別れたつても、  
口笛ふけば君といつしよよ、

明日はまたあへる二人さ。

淋しがるなよ

わたしの小鳥、

淋しいときには口笛ふきな

ジノ一のやうにアンゼラスのやうに、

二人の心の楽しい合圖。

淋しがるなよ

私の小鳥、

口笛ふけばいつもいつしよよ、

いつしよにゐるのよ。

## 失業者の汗

ひとつのビルディングが出来上ると

蜘蛛の子を散らすやうに、

あてもなく散らばつてゆく失業者の群。

西陽に聳えたつた七階のビルディングは

ひとりで伸び上つたやうな面付きをして、

散つてゆく俺達をあざ嗤つてゐる。

ガランドーの窓、窓、窓、窓、

みんな齒の抜けた口か。

ヒヒヒヒ……何を囓つてゐるんだッ。

いまにみる、ビルディングの土臺が腐るから、俺達が滾したあの汗の流れは、知るまい怖ろしい破壊力と腐蝕力をもつた玉水なのだ。

## 群衆の中へ

—— 神樂坂にて ——

夏がやつてくるのだ！

季節の先驅者のやうに

伊達な都會人は浮腰になつて、

ソーダ水にストローをさし込んでる。

「紅屋」の客もいつか衣こゝろをかへて

冷たいアイスクリームの尻を甜めてゐる。

素晴らしい夏が襲つてくるのだ。

月ももう夏痩せをしてきたのか。

窓の下には婉姫としてつゞく

雑然とした群衆の蠢めき、

あゝ、何て無さま人の流れだ。

俺はこの窓から飛び降りていつて

あの群衆の流れに棹さしてやるのだ。

夢みがちな俺のロマンチストよ！

涼しげなサロンで冷たい味覺を享樂し、一

都會の夜の哀愁に泣いてはゐられないのだ。

降りてゆけ！ 飛び降りてゆけ！

あの行くところを知らない群衆の中へ、

たとへ、身は千々に裂け砕けても、

胸は押し潰されて血みどろになつても

渦のやうな群衆の中へ飛び降りてゆけ！

あゝ、そしてこの白い神経にビクビクする額を

あの堅い舗道で思ひきり打ち砕いてやるのだ。

「青年の飛降り自殺！」

そんな記事が明日の三面記事を賑はすだらうが――。

## 労働小感

どんな生活現象からだつても、ひとつの人生の相を見つけ出さうとする努力と、熱とがあれば、何だつて面白いし、愉快なものだ。

古風な夢を捨てるといふことは、時代の尖端に生きてゆくことだ。樗牛の言葉をかりれば、吾人は須く現代を超越せざる可らず。

働くといふことは、気分をスポイルされないだけでもいゝ、五月の陽のもとに、薄いシャツ一枚で働いたとき、はじめて生れ出でゝきた悦びを感じた。

メランコリーなんて、働かないものゝ持病だ。身を起せば心もおきる。

萬巻の書を読むよりも、まづ一日でいゝから働いてみる、生き方なんて難しい問題ぢやない。露西亜のムジユツクだつて知つてる眞理だ、トルストイもその人生感をムジユツクから教つたのだ。

134

● どん底に身を落して働けるといふ経験からきた意識が常にあれば、人に諷<sup>へつ</sup>つたり、阿諛<sup>おご</sup>らなくてすむ。

● 働くといふことに於て、人間は平等な筈だ。働きさへすれば、ブルヂョアもなければ、プロレタリアもない。

● 十時間労働はいかに長くして、退屈で、倦怠的であるか、マルクスを論じ、レニンに私淑する友よ、まづやつてみるがいゝ、

● 働きつゝ、汗をながしつゝ、雲をながめる気持ち愛する。

● 芭蕉の時代はすぎた。西行の時代も過ぎた。

● 「私は自由の伴侶だ」と言つた、草の葉の詩人、ホイットマンの生活と思想をおもふ。彼が常にいつた如く世界は萬歳だ、労働者にとつて萬歳になるときがくるのだ。

● 労働者にだつて花を愛する心と餘裕はある。春がくれば鐵工場の隅にも、滾れてゐた草の芽は伸び、花も咲いてくる。

● 働きつゝ、愛しつゝ、信じつゝ、——生きてゆくことが「明日」の日の私の信条である。

● インテリゲンチヤの自由があるとすれば、まづ、それから捨てゝかゝることだ。自由を捨てるといふことは、そこに眞の自由を見え出すことだ。

● 人間は人間らしく働けば、それで結構だと漱石は言つた。喰ふためでなく、生

135

きるためにさ。

熟れすぎた林檎は放つておいても、落ちて腐るものだ。林檎がいつまでも枝についてゐたら、新しい林檎の樹はない筈だ。

「働くものは喰ふべからず」、レニンの言葉をかりなくとも、働かなければ喰へなくなつてしまつた。

涙が人生に對する慰藉となるなら、汗は時代に對する儘に清涼劑だ。

働け、働けば一日の糧が得られる。そこから新しい夢を築いてゆくのだ。「明日」に生きるには、「昨日」の夢はあまりにも古風すぎる。

—了—

昭和四年十月十日印刷  
昭和四年十月廿五日發行

烈風々景

(定價六十錢)

烈風

著者 大島庸夫

不許  
複製

發行者 大島虎雄

景風

印刷者 山崎竹次郎

東京市外戸塚町字諏訪九〇

發行所

行人社

振替 東京二三四五

生田 春月 著

定價五十錢

(送料六錢)

詩集  
傳記

### メリケとヘルデルリン

裝幀優美  
菊半裁版  
肖像寫真入

メリケとヘルデルリンとは獨逸が生んだすぐれたる詩人であるが、共に片隅の詩人不幸な詩人として世に埋もれ、忘れられたる詩人である。獨逸詩壇がこの二人に對する待遇は、我詩壇に於ける山村暮島、三富朽葉に似てゐるといふ。メリケの詩に哀愁があるとすれば、ヘルデルリンの詩には悲壯の響きがある。その小説的な波瀾に富んだ二人の傳記と世にかくれたる詩篇とは、二詩人を愛好して已まない著者によつて、更に興味深く、更にダイヴツドに讀者の心を魅惑する。

生田 花世 著

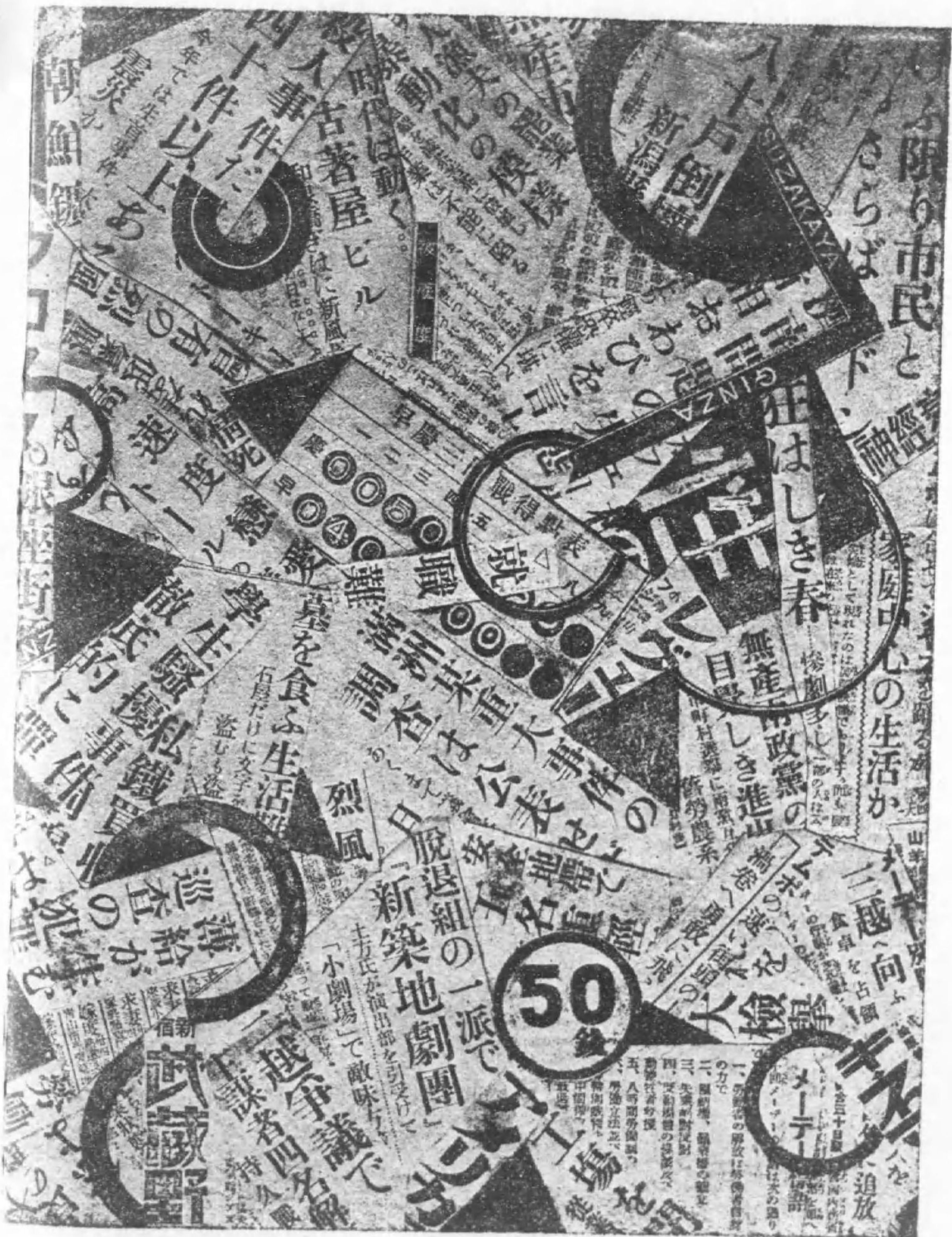
(近刊)

### 近代 日本 女流作家群像

四六判  
箱入美本  
肖像寫真入

明治、大正、昭和に亘つて、我國女流文壇の主流を不斷に歩み續けてきてゐる著者によつて、一葉以降、今日の新しきプロ作家に至る、女流作家の大勢を一眸的に見得るやうに書かれたものが本書である、この一巻こそ過去に於ける我國女流作家運動の動きを語り、現時新興勢力の中に進出しつゝある婦人作家の將來を指示するものである。

東京市外戸塚町 行人社發行  
地址 〇九訪識字  
振替 口座  
東京二三四五



終